

平成28年度「きのさき見て歩き」第3回開催しました

10月17日（月）「きのさき見て歩き」第3回「～玄武洞・歌枕を訪ねて～」を開催しました。

・戸島区



青空が広がり、円山川の色も美しく、葦の穂とセイタカアワダチソウの銀と金の帯が広がる戸島湿地の景観は素晴らしかった。戸島区内を歩き、江戸時代に水利の便が悪く苦勞をしてきた戸島の村が、安政6年に結の村と交渉し、川の水を灌漑用水として利用できるようになったことを刻した「百載不朽碑」を訪ねる。

・結の浦

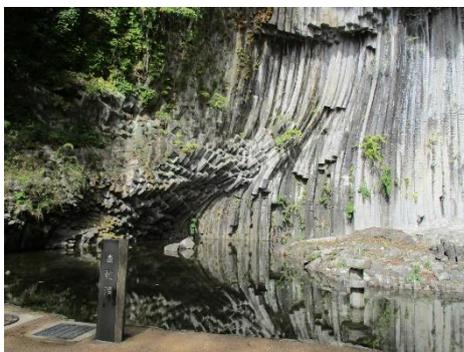


平安・鎌倉、江戸と三時代を代表する歌人が歌を詠んだ歌名所。但馬の湯に行く途中に立ち寄り、契りを結ぶと「結」の地名をかけて歌に詠まれることが多かった。

「たちかえりいくといそげばさしてこし結の浦のかいもなきかな」

大中原能宣（平安時代）

・玄武洞



河東碧梧桐が、明治42年来遊して「かつて写真と絵画とで見たポンペイの廢墟の一部が、ここに実現したような思いをして、玄武洞のつつきにある左右の巨柱とも見える石層に対して立った」（「続三千里」）と書いた文章や田山花袋（大正4年来遊）の文章を読み合う。

・円山川を渡る（玄武洞～二見）



船で円山川を渡る機会がなかなかないので、船上で参加者は子どものようにはしゃぎ、歓声が絶えなかった。葦の間を吹く川風も心地よく、船上から見た円山川の眺望はまた格別だった。

・二見の浦



平安時代、古今集の歌人であった藤原兼輔がこの二見の浦を詠んだことから、歌枕として多くの歌人が訪れるようになったという地。藤原兼輔の歌、宗祇法師の俳諧（室町時代）、加茂直兄の長歌（江戸時代）をここで読む。二見天満宮には加茂直兄の歌を刻んだ石碑がある。右の写真は大古より湧出するという二見の清水の水源地。「玄武洞」と名付けた柴野栗山が「無限水」と命名し愛したという。